

# 松下幸之助の 自然・宇宙観と人間観



(PHP研究所刊・1972年)

PHP総合研究所  
第一研究本部本部長  
佐藤悌二郎

では、松下幸之助は、どのような人間観をもつにいたったのだろうか。まずは、『人間を考える』のなかで提唱された「新しい人間観の提唱文」をみてみよう。

## 新しい人間観の提唱

宇宙に存在するすべてのものは、つねに生成し、たえず発展する。万物は日に新たにであり、生成発展は自然の理法である。

人間には、この宇宙の動きに順応しつつ万物を支配する力が、その本性として与えられている。人間は、たえず生成発展する宇宙に君臨し、宇宙にひそむ偉大なる力を開発し、万物に与えられたそれぞれの本質を見出しながら、これを生かし活用することによって、物心一如の真の繁栄を生み出すことができるのである。

かかる人間の特性は、自然の理法によって与えられた天命である。

この天命が与えられているために、人間は万物の王者となり、その支配者となる。すなわち人間は、この天命に基づいて善悪を判断し、是非を定め、いつさいのものの存在理由を明らかにする。そしてなにもものもかかる人間の判定を否定することはできない。まことに人間は崇高にして偉大な存在である。このすぐれた特性を与えられた人間も、

享けたお互い人間が担っている役割、使命とはどのようなものか、人間がこの世に存在する意義はどこにあるのかというところについて、松下なりに考えた結論が書かれている。敗戦直後の、日本の混乱した世相のなかでPHP活動を始めたとき、お互い人間の繁栄、平和、幸福をより高めていくためには何が大事かという問題を真剣に考えた松下は、それにはまず人間そのものがどのような存在なのかについての正しい認識をもたなければいけないということに思いいたり、人間研究に取り組んだのである。

個々の現実の姿を見れば、必ずしも公正にして力強い存在とはいえない。人間はつねに繁栄を求めつつも往々にして貧困に陥り、平和を願いつつもいつしか争いに明け暮れ、幸福を得んとしてしばしば不幸におそわれてきている。

かかる人間の現実の姿こそ、みずからに与えられた天命を悟らず、個々の利害得失や知恵才覚にとらわれて歩まんとする結果にほかならない。

すなわち、人間の偉大さは、個々の知恵、個々の力ではこれを十分に発揮することはできない。古今東西の先哲諸聖をはじめ幾多の人びとの知恵が、自由に、何のさまたげも受けずして高められつつ融合されていくとき、その時々々の総和の知恵は衆知となつて天命を生かすのである。まさに衆知こそ、自然の理法をひろく共同生活の上に具現せしめ、人間の天命を発揮させる最大の力である。

まことに人間は崇高にして偉大な存在である。お互いにこの人間の偉大さを悟り、その天命を自覚し、衆知を高めつつ生成発展の大業を営まなければならない。

長久なる人間の使命は、この天命を自覚実践することにある。この使命の意義を明らかにし、その達成を期せんがため、ここに新しい人間観を提唱するものである。

この提唱文は昭和四十七年に発表されたが、これはそのとき初めてつくられたものではない。昭和二十六年九月に発表された「人間の天命」という「PHPのことは」のなかで、「人間宣言」といった形で出されたのを、その後、検討に検討を重ねてきたものである。つまり、長年にわたる思索と検討のなかから生まれたものだということである。

## 松下幸之助の自然・宇宙観

ここでまず注目すべきは、提唱文の第一節「宇宙に存在するすべてのものはつねに、生成し、たえず発展する。万物は日に新たにあり、生成発展は自然の理法である」というところである。ここには、松下の、いわば自然・宇宙観が簡潔に示されている。

ここで自然・宇宙観が語られているのは、人間の本質を考えるにあたっては、やはり人間の生みの親であり、生活の場である、この宇宙に対する正しい認識をもつ必要があるという考えからである。

なお、この宇宙というものについて、松下は、宇宙は大きな意志を有し、この宇宙における営みのすべてが、この意志に基づいて行われているとも考えていた。「宇宙の大意志」が「自然の理法」として万物、万人にあまねく働いており、それが目指している基本の方向が、万物、万人、さらには宇宙全体のかぎ

りない生成発展だということである。

この「生成発展は自然の理法である」という考えは、松下の自然・宇宙観のなかで最も重要なコンセプトである。この考えが、「かぎらない繁栄と平和と幸福とを、真理は、われわれ人間に与えています」(PHPのことば その一 繁栄の基)という考え方の根拠、前提にもなっている。つまり万物、万人、さらには宇宙全体が生成発展しているから、かぎらない繁栄と平和と幸福が与えられているということがいえるわけである。

## 人間の使命、役割

では、このような宇宙のなかで、人間はどういった役割、使命をもって、この宇宙、狭く言えば、この地球上に生まれてきたのか。

そうした人間の役割、使命をつかむためには、まず人間がこの宇宙、この地球にどのようになつて生まれ、存在するようになったのかをみなければならぬと松下は考え、人間の誕生、発生についてさまざまに思いを巡らせた。すなわち、われわれ人間は、親から生まれた。その親はだれから生まれたかというところ、そのまた親から生まれたかというところ、そのまた親の親から生まれたかというように、ずつと遡り、ついには最初の間、人間の始祖はいつたいたどのようなものだったのか、どのようにして生まれたのかとい

うことを考えたのである。

その結果、松下は、やはり最初の人間をこの宇宙に生み出し存在せしめている、何か大きな力、人間の力を超えた大本の力、いわば「宇宙根源の力」ともいべきものがあるにちがいないという考えにいたった。その力の働きによって、人間は、この宇宙に生み出され、存在せしめられている。また人間ばかりでなく、人間が生きている地球なり宇宙という環境も、人間以外の他の万物も、すべてこの「宇宙根源の力」の働きによってつくられたと考えられる。そしてこの「宇宙根源の力」は、人間や万物を生み出す際に、人間には人間特有の、その他の万物には各々特有の本質、役割、使命をそれぞれに与えたと、そう松下は考えたのである。

したがって、さきの「宇宙の大意志」というのは、実はこの「宇宙根源の力」の意志にほかならない。それは「自然の理法」として宇宙に存在するすべてのものに働き、その働きによって、地球はもとより、大宇宙そのものが支えられ、動かされ、生成発展の姿が生み出されているわけである。

では、「宇宙根源の力」から与えられた人間の本質とは何か。それは宇宙の動きに順応しつつ、万物を活用して自他ともの繁栄を生み出すことのできる本性が与えられているということである。これは人間のみにも与えら

れた特質であり、過去において人間が万物の特質を見出しつつ、それらを活用することによって逐次進歩発展してきたという事実からも、そのことは明らかだといふ。

そして、この本性が与えられていることによって、人間は万物の王者として、すべてのものを生かし、真の繁栄を実現していくという崇高な使命を負うといふ。したがって、人間は、この宇宙のなかで、みずからのおかれた立場、使命の重大さを認識し、万物、万人を生かし、共同生活の向上を図っていくなければならないといふのである。

ところが、そのように万物の王者たる本質をもった人間も、現実の生活においては、しばしば貧困に陥り、争いを繰り返す、不幸におそわれてきている。それは、お互い人間が、その本質、使命を十分に自覚認識していなかったところに根本の原因がある。よって、万物の王者として、万物、万人を生かしつつ、共同生活の進歩向上を図っていくという人間としての基本の使命を、お互いがまず正しく自覚認識することが、繁栄、平和、幸福実現の第一歩だと、松下はいつのである。

### 人間道と礼の精神

その使命を生かす道として提唱しているのが「人間道」である。以下が、昭和五十年に発表されたその提唱文である。

政治、経済、教育、文化その他、物心両面にわたる人間の諸活動はすべて、この人間道にもとづいて力づくよく実践していかなければならない。そこから、いつさいのものが、そのときどきに感じ、そのところを得て、すべてが調和のもとに生かされ、共同生活全体の発展と向上が日に新たに創成されるのである。

まさに人間道こそ人間の偉大な天命を如実に發揮させる大道である。ここに新しい人間道を提唱するゆえんである。

ここにあるように、「人間道」は万物の王者としての人間が歩むべき道、とるべき基本の態度であり、二本の基本的な柱からなる。第一は、万物、万人いつさいがあるがままに認め、容認すること、第二は、そのうえで万物、万人それぞれの特質に応じて、適切に処置、処遇することである。

この基にあるのは、万物にはそれぞれに合った使い道があり、この世のもので無用のものはないこと、また人間も、お互いそれぞれに磨けば光る無限の可能性をもっており、この世の中に一人として無用の人間はいないという考え方である。無用、有害だと思われるものがあるのは、その活用の仕方にまだ足りない点があるからだ、というのが松下の考えであった。

たとえばこの人間道の考え方を、お互い人間同士にあてはめると、お互い人間に共通した普遍的特質と個々人の個性、天分をありのままに容認し、そのうえで、その特質が生きるように適切な処遇をしあうことが、お互い人間としての務めということになる。人間の本性は、否定しようとしても否定できるものではないから、これを認め、どう生かすかを考えていくことが大切だといふのである。

そして、この「人間道」を支えるのが「礼の精神」である。これは、お互い人間が、この宇宙に存在しているあらゆる人や物に接する場合に大切な基本的な心がまえをいふ。より具体的にいえば、礼の精神とは、お互い人間が、この宇宙における宇宙根源の力や人や物などに接しつつ人間道を歩むにあたって、それらいつさいに対して感謝と喜びの心をもつて接し、その心を素直に表していく姿である。そのような心をもつことが、人間道を正しく歩んでいくためには必要で、この礼の精神こそが、万物に対して適切な処置、処遇を行なっていくために欠かすことのできないものだ、松下はいつのである。

### 衆知と素直な心

また、松下は、そつした礼の精神と併せて、人間がその尊い使命を果たすためには、衆知を集めることが不可欠だとしている。お互い

### 新しい人間道の提唱

人間には、万物の王者としての偉大な天命がある。かかる天命の自覚に立つていつさいのものを支配活用しつつ、よりよき共同生活を生み出す道が、すなわち人間道である。

人間道は、人間をして真に人間たらしめ、万物をして真に万物たらしめる道である。それは、人間万物いつさいがあるがままにみとめ、容認するところからはじまる。すなわち、人も物も森羅万象すべては、自然の摂理によって存在しているのであって、一人一人物たりともこれを否認し、排除してはならない。そこに人間道の基がある。

そのあるがままの容認の上に立つて、いつさいのものの天与の使命、特質を見きわめつつ、自然の理法に則して適切な処置、処遇を行ない、すべてを生かしていくところに人間道の本義がある。この処置、処遇をあやまず進めていくことこそ、王者たる人間共通の尊い責務である。

かかる人間道は、豊かな礼の精神と衆知にもとづくことによつてはじめて、円滑により正しく実現される。すなわち、つねに礼の精神に根ざし衆知を生かしつつ、いつさいを容認し適切な処遇を行なっていくところから、万人万物の共存共栄の姿が共同生活の各面におのずと生み出されてくるのである。

一人ひとりの知恵にはかぎりがあり、古今東西、多くの人々の知恵を融合調和させてこそ大きな力になるといふのである。松下は、この衆知にはさまざまな種類、段階があるとし、お互いに衆知を集めることの大切さをよく認識して、より広くより高い衆知を集めるよう努めるとともに、個々人の知恵もたえず高めよう努めることが大切だ、特に指導的立場に立つ者は、みずからの知恵を磨き、同時により多くの衆知を集めるように心がけることが肝要だといっている。

それともう一つ、衆知とともに大切しているのが「素直な心」である。松下のいう素直な心は、ひと言でいえば、何ものにもとらわれない曇りのない心である。よって、素直な心になれば、物事のありのままの姿、真実を見ることができ、正しい価値判断ができるようになる。それゆえに、松下は、素直な心は、お互い人間が真の繁栄、平和、幸福を実現していくための基本の心、鍵であり、日常生活のあらゆる面で、お互いに工夫、実践、反省を繰り返す、素直な心を養い高めたいとしている。

以上が、松下の自然・宇宙観と人間観の骨子である。こついつた自然や宇宙、人間に対する見方を、松下幸之助は長年の体験と思索、検討のなかで構築してきたのである。